



PipeLine

特集

■ 社会分野分科会 ■ 生命・医療分科会

分科会の現場から



No.50 Contents

特集「分科会の現場から」	P1~4
教養のページ 地球を知りたい人たちの協働	P5~6
FD部会より 「アクティブラーニング」をしよう!	P7~8
共通教育実施委員会からのお知らせ 共通教育でアカデミック・ライティングの準備を	P9

1 社会分野分科会

▶ 社会分野分科会長 遠藤晶久(人文社会科学部)

当たり前のことですが、私たちはこの世界で一人ぼっちで生きているわけではありません。日常生活において、家族や友人、あるいは近所の人たち、学校の人たち、職場の人たちなど多くの人たちと関わり合いながら生きています。こういった人たちは、あなたにとっては「顔の見える」人たちですが、あなたの生活に「顔の見えない」人たちがたくさん関わっていることもまた自明のことだと思います。あなたが朝ごはんのためにコンビニでパンを買ったとして、それを可能ならしめているのは、原料(たとえば、小麦)を作った農家やパン製造工場で働いている人たち、そのパンを企画した人たち、販売した人たち、関わっている人をあげたらキリがありません。

私たちは人間と人間が形成する「社会」から逃れられないわけですから、みなさんの専攻が何であれ、今後生きていくうえで社会について学ぶことは重要なことです。個々の人間同士の交渉やコミュニケーションについて学ぶことも重要ですが、現代社会では世界中のことがかつてないほど強くお互いに結びつきあっていますので、大勢の人々で成り立っている世界について学び、その世界でこういったことが起きる可能性が高いか、その世界の中の制度配置がどのように私たちの生活に関わってくるのか、あるいはその反対に、私たちの生活を変えるには誰(どの組織)に働きかければいいのかなど考察しておいて損はないはずです。

社会分野では全学の学生に向けて、「社会」について考察する科目を提供しています。2017年度は、社会分野分科会で70を超える数の科目を提供しています。担当している教員も人文社会科学部を始め、教育学部、地域協働学部や各種センターなど様々な組織に所属しています。

社会について考えるときには様々なアプローチの仕方があり、スタンダードな学問分類でいえば、経営学、経済学、社会学、政治学、法律学などの学問がこの問題を扱います。共通教育の社会分野としても、その学問領域を大きく紹介するような科目を設置していますが、それと同時に、後述する「平和と軍縮」のように現代社会における重要なトピックについて重点的に学ぶ科目も配置しています。

また、一人の教員が学期を通して講義形式の授業をするような一般的な科目も、もちろんたくさん提供をしていますが、それとは異なる特徴的な授業も提供をしています。いくつか紹介をしましょう。

「土佐の海的环境学I: 柏島の海から考える」では、夏休みに高知県の南西部に浮かぶ柏島(大月町)へのフィールドワークをしながら、海的环境問題とその解決策について考えます。もちろん、ただ単にフィールドワークに行くのではなく、その前に、柏島や環境問題について書かれた資料を読み込み、レポートを作成して、事前の準備を入念に行います。



サービス・ラーニング型の授業も提供しています。「中山間地域の生活と環境I」では、農作業・イベント実施・研修・調査活動などのサービス・ラーニング活動を県内で実施して、地域再生や地域防災をテーマにしながら、生活や社会状況についても理解をしています。

「平和と軍縮」は、オムニバス形式の授業です。教員は法律学、政治学、経済学などの立場から、この問題を取り上げて議論をします。異なる視点から一つの問題についてどのように考えるかというプロセスを経験することになります。



また、同じタイトルでも教員によって異なるトピックを強調した授業を提供しています。たとえば、2017年度は、「経済を考える」という科目を3コマ用意しました。それらの内容はすべて同じかというとそういうわけではなく、それぞれ情報の経済学、マクロ経済学、日本経済論と異なるトピックを中心に学びます。シラバスをよく読んで、その授業がどのような内容なのかを確認して履修をしましょう。

一人ひとりの人間はそれぞれ意志を持って考え行動しますので、そういった人間同士で成り立っている「社会」は大変複雑で、社会について学ぶことは一筋縄ではいきません。様々な観点から、あるいは様々なアプローチで考えることは、社会について理解を深める近道になるはずです。

2 生命・医療分科会

▶ 生命・医療分科会長 野田智洋(医学部)

生命・医療分科会は、平成15年に旧高知大学が旧高知医科大学と統合し、共通教育として同分野の開講が可能となったことにより設置されることになった。そもそも統合前の旧高知大学の時代から「健康」が必修科目として開設されていたが、専門知識を有する教員は限られていたことから、医学の基礎的な知識を提供することが期待されたのである。現在は、選択科目として「健康A」、B、C、Dの4つのコースを開設し、看護学科の教員と保健管理センターの医師、ならびに教育学部の保健体育や睡眠、食育などを専門とする教員がオムニバス形式で知識を提供している。コース毎に多少の違いはあるものの、喫煙、食事、運動、睡眠などの生活習慣と健康との関連、メンタルヘルス、性に関する知識など、親元を離れて一人暮らしを始めたばかりの学生にとって必要と思われる内容を第1学期に提供してきた。

特に、現在、性感染症の増加が社会問題化しており、早急な対策が必要とされている。深刻な合併症を引き起こす梅毒の患者数が急激に増えており、昨年では東京都だけでも男性1,218名、女性455名と、この5年間で7倍近くに急増したのである。中学校や高校の教員が性教育の重要性についていくら認識していても、親や社会の側に「寝た子を起さずな」との意見も根強くあり、裾野が広がっていないのが現実であろう。しかしながら大学生は大人である。自由の裏側にある責任を自覚するためにも、この時期に性教育、命の教育、身体の教育を受けておくことが重要だろう。ありあまる時間とエネルギー、大きな自由を手に入れた若者たちに、性教育を通じて健康へのリスクと自分や将来のパートナーの身体を守る責任を自覚して欲しい。親の目の行き届かない多くの学生が危険にさらされている現状において、分科会の果たす役割は極めて大きいと思われる。

もう一つの重大な脅威に関しては、平成25年度から「アルコール学概論」で対応していただくことになった。先日もある大学の学生が急性アルコール中毒で亡くなったが、実は毎年どこかの大学で死亡事故が起きている。高知県はアルコールに寛容な土地柄でもあるし、海の幸、山の幸にも恵まれており、学生たちが飲酒する機会も多いと思われる。講義では、急性アルコール中毒防止のための知識や飲みコミュニケーションの方法を学ぶばかりでなく、飲酒による健康被害について医師から直接話を聞いたり、土佐の酒文化や歴史を学ぶために酒蔵見学に行ったりと、非常に贅沢な内容だと聞いている。是非、履修した学生を中心にアルコールに関する医学的・文化的な知識が広まって、今後とも悲しい事故が決して起らないよう願っている。



さらに、今年度からは「一般学生のための医療と医学の知識」が始まった。保健管理センターの医師が、これまで行っていた講義で受けた質問やセンターで対応した症例、学生との交流に基づいて、是非、知っておいて欲しい医学的知識を幅広く提供したいと申し出てくださった。高校までの教育では不十分で、しかも日常生活を送る上で知っておきたい基礎的な医学的知識はたくさんあるようだ。たとえば筆者の世代では、卵子が老化するという事実を数年前に放送されたNHKの番組で初めて聞かされたという友人が多くいて、知ってさえいればもっと早く婚活や妊活をしていたのにと悔しがる。生老病死は避けられない。基本的な医学的知識というのは、どの学部で学んでもいつかどこかで必要とされるものである。だからこそ、統合前の旧高知大学で「健康」が必修科目であったのだ。病気や怪我と無縁で、体力に自信があり、精神的にも充実している学生たちにとって生命・医療分科会が提供する講義は一見すると興味を惹かれるテーマではないかも知れない。しかし、いつの日か「知っててよかった」と思える保険のような存在だと考えている。



分科会

高知大学の共通教育の授業は、共通教育実施委員会の下にあるカリキュラム等編成部会を中心に、カリキュラム編成や毎年の開講授業が決められています。その下に、各学部等から選出された先生たちで構成される各分野や科目ごとの分科会があり、開講授業の検討、自己点検評価、FDがそれぞれに行われています。

分科会には、「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」「人文分野」「社会分野」「生命・医療」「自然分野」「外国語」「キャリア形成支援科目」「スポーツ・健康」「日本語・日本事情」があります。

地球を知りたい人たちの協働

理工学部 橋本善孝

私の専門は地質学です。地質学の一つの特徴は時間の学問だという点が挙げられます。みなさんが海岸の地形を見るとき過去から未来に渡ってこの風景は永遠だ、と感じることがあると思います。しかし、実際は断層や褶曲があるのが一般的で、確かに地球は躍動していることが分かります。一方で、生活を短時間で一変させる地球の躍動もあります。例えば地震、火山や地すべり、洪水などです。巨大地震は百年に一回程度の現象で、東日本大震災のような超巨大地震は千年に一回程度と考えられています。人間の人生からみれば一回経験するかしないかの現象です。ところが、地震は100万年に千回から一万回の現象ですので、46億歳の地球から見れば日常茶飯事とも言えます。このように地質学では人間の感覚を超えた時間スケールを自由に伸び縮みさせて考えなければなりません。地質学のもう一つの特徴は、物質の学問という点です。土砂や岩石といった大地を構成する物質を実際に手にとって行う学問です。どのような場所にどのような岩石が露出していて、どのように変形しているのか？これらを調べることによって地球のメカニズムを探ります。

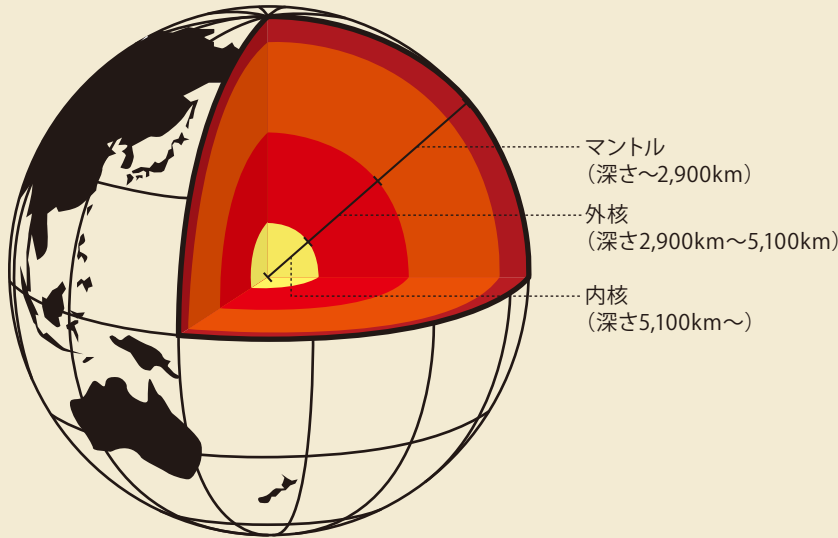


地質学と同様に地球を調べる学問に、地球物理学という分野があります。地球物理学でも、地震、火山、気象変化などを研究します。例えば地震の研究では地震計による地震波の観測から、震源の位置、断層の型、地震の規模、破壊領域の広さ、などがすぐわかってしまいます。地球物理学の特徴は波や流れなどの物理量(長さとか重さとか時間といった物理単位のある量)を観測することによって様々な地球の現象を理解することにあります。

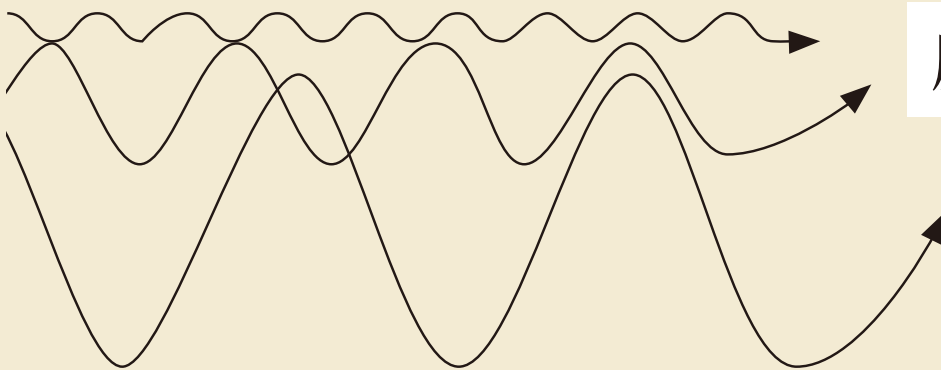
地球物理学と地質学との違いは何でしょうか？先ほどの地質学の特徴である時間と物質といった観点で比較してみましょう。地球物理学では時間スケールは人間が観測している期間、概ね現在進行形の事象を対象としています。また、物質という観点から見れば、地球物理学は物質そのものを扱う学問ではありません。すなわち地質学と地球物理学はお互いに不足しているところを扱っていると言えます。両者ともに地球を理解しようとする学問なので、両者が不足しているところを補完しあうことで、より地球の理解が深まると考えられます。

地球を知りたい人たちの協働

一例を挙げましょう。地球内部の大部分を占めるマントルはカンラン岩という岩石でできていると推定されています。人類はまだ直接マントルを手にしたことはありません。では、なぜ我々はマントルがカンラン岩という岩石でできていると推定できるのでしょうか？地球物理観測でマントルの中を通る弾性波の速度が推定できます。一方で陸上のある地質から採取できるカンラン岩の弾性波速度を実験室で測ると、概ね同じ速度になるのですね。この弾性波速度の一致から、マントルの岩石はカンラン岩と推定されています。地球物理的観測科学と地質の物質科学が融合して地球の理解が深まった良い事例と言えるでしょう。両者を繋げたものは何かと言えば、それは弾性波速度という物理量です。



弾 性 波 速 度



これをより一般化してみましょう。あなたの専門分野とややずれている分野がお互いに補完して新たな境界領域を生み出そうとしているとします。ですが、自分の専門分野の居心地がよいためか、なかなかうまくいかないことも多いです。いかにして両者の融合を促すかが問題です。地質学と地球物理学の例を引くならば、地球を理解したいという共通の目的が必要です。また、手段としては、物理量という共通の言葉を介することによって融合が進みました。同様に共通の目的を明確にし、何か共通の一点を介することによって、異なる両者をより広い領域へ繋げようとする。大学の改革後、新たな教育現場がうまくいく融合するかといった問題も、同じ視点ではないかと思えます。



「アクティブラーニング」をしよう！

FD 部会長 大学教育創造センター 立川 明

「アクティブラーニング」とは

文科省がアクティブラーニングを推奨しているため、国内でもアクティブラーニングの手法を取り入れた授業を行っている大学や教員が増えています。文科省は、「授業中」に「先生」が「学生」に「授業参加」させるような手法を取り入れることを求めています。学生参加の方法として、「読む」、「書く」、「話す」ことを取り入れればよいと言うことで、昔ながらの講義のまま教科書を読ませるとか、板書をノートに写させるとか、質問がないか尋ねるなど「読む」、「書く」、「発表する」を取り入れているのでアクティブラーニングだとしている先生もいたりします。

アクティブラーニングとは、Active Learning をカタカナで書いただけです。Active Learningをそのまま翻訳すると、能動学修となります。能動学修とは、あなたが能動的に学修するということです。あなたが能動的であれば、先生がどのような授業をするかは本当は関係ありません。ただ、何もしないと皆さんの行動も変わらないので、授業を変えて何とかしようともがいているのが今の日本の教育界です。

「変えられるのは今の自分だけ」過去も他人も変えられません。周りが皆さんのために何かしてくれるのを待っていても、その日は来ません。あなた自身がやり方を変えてみましょう。

アクティブラーニングが必要な3つの理由

まず、就職するとチームで働く必要があります。専門性の高い研究職でも、状況は同じです。そのため、就職試験では、コミュニケーション能力がはかられるようになりました。周りの人とうまくコミュニケーションを取ることができないと、些細なことでトラブルになったりしてやめてしまいます。従って、教科に関する授業を受けながらグループワークなどの機会を使ってコミュニケーション能力を高めておく必要があります。コミュニケーション能力なんて部活やバイトでも身につくそうですが、PipeLineNo.45にまとめたとおり、1年から3年までの2年間で伸びていないことが分かっています。部活やバイトでは能力を伸ばすことはできません。

また、就職すると知識が必要です。キャリア支援の専門家によれば、知識はじゃまにならないのでたくさん持っておいた方

がよいことが共通に言われています。つまらないとしか感じない先生の授業も、知識としては役に立つことが多く、授業の面白さやアクティブラーニングを取り入れているかどうかという授業手法にかかわらず、しっかり聞いてしっかり記憶していた方が良さそうです。そのためには、自分で能動的に学ぶしか方法はありません。あらゆる授業で予習、復習をしっかりし、またそれに必要な時間の確保のため、自分のスケジュールを自分で決めるセルフマネジメントが必要です。そしてこのマネジメントする力は、社会に出てから必ず役に立ちます。

三つ目に、グローバル化の波が否応なしにあなたの会社にも訪れるということです。たとえば、経済学の授業を8単位取ったとしましょう。1単位に相当する学修時間は授業時間を含めて45時間が基準です。2単位科目であれば90時間です。授業時間はこのうち1/3ほどしかありません。つまり60時間を超える時間の自学の時間が必要です。アメリカやフランスで8単位とった人は、360時間分の質と量に相当する学修をして合格点に達した事を意味しています。日本の大学生はほとんど授業時間以外の勉強をしていないので、8単位分の学修は、120時間程度の話の聞いただけである人がほとんどです。グローバル化した社会では、否応なしに同じ土俵で扱われます。そのため、日本の学生は何も知らないと思われています。先生が宿題を出さないことを嘆いても何も変わりません。自分が変わるしかありません。

アクティブラーニングを自分のものにしよう

大学は就職予備校ではありません。ですが、専門性の高い学問は、学修の仕方や研究の仕方は確かにアカデミックですが、社会で直接役に立つ内容でもあります。たとえば、化学を大学で学ぶことは必ず就職してから役に立ちます。オウム真理教の事件報道の時にメディアに携わる人の化学音痴にあざれたことを思い出しますが、福島原発事故の時にも化学音痴、物理音痴を感じました。報道関係者の科学の知識のなさは全く改善されていないようでした。文系の人にとっても化学や物理を学ぶことは価値あることです。大学は就職予備校ではありませんが、アカデミックな学問の知識や研究方法は、必ず社会に出てから役に立ちます。従って、教科の授業＝キャリア支援科目です。

そこで必要になるのが、あなたが自分で先生に頼らずアクティブラーニングをすることです。はじめて大学の授業を受けたとき、期末試験まで全てのことを覚えていられるだろうか、ぞっとしませんでしたか？ 学修方法は人それぞれに合ったやり方があります。ただ、短時間にたくさんの学修をした経験がないと、自分に合った学修の工夫がない人が多いです。まずは予習をしましょう。次の授業で扱う内容を一通りしっかり勉強して覚えていきましょう。そうすると先生のお話の聞こえ方が変わってくるはず。全ての授業で予習、復習をし、次の段階として、工夫して同じ内容の学修にかかる時間を減らしてみましょう。自分に合った方法を見つけ、学修量を増やし、それにかける時間を減らし、効果的に記憶していく方法を見つけ身につけましょう。何よりもその身につけた学修方法が、あなたの一生の財産になるはず。です。





共通教育でアカデミック・ライティングの準備を

共通教育主管 近藤康生

共通教育を通じて身につけてほしい重要なスキルに作文能力があります。最近では、特に学術的な文章やその技法のことをアカデミック・ライティングと呼んで、授業で扱う大学が増えています。アカデミック・ライティングに関わる授業は、本学でも一部の学部や学科・コースで、初年次科目の学問基礎論や大学基礎論の一部として実施されています。また、今年度の第1学期には、教養科目で「文章表現入門」が開講されました。

日本語の作文能力は、日頃のレポートや卒論などだけでなく、社会に出てからもあらゆる機会が必要となるもので、苦手な人も逃げられません。作文の基礎力を鍛えるには、慣れた日本語であっても、まず読書経験を積むことが重要です。特に苦手な分野や自分にとって未知の分野については、まず新書から始めるのが良いでしょう。近年、わかりやすく解説した新書がこれでもかというくらい出ています。2～3時間で軽く読めるものも多いので、関連したテーマの新書を読み比べるのも有益です。著者によるスタンスの違いもわかり、自分の考えをまとめるきっかけとなります。

共通教育の段階では、専門でレポートや卒論を書く前の準備として日本語で書かれた学術論文に慣れておくことをお勧めします。共通教育の段階で学術論文というと敷居が高そうですが、Google Scholarなどで簡単に検索・閲覧できますし、日本語ですから全く歯が立たないことはないはず。しかも、これから学ぼうとする専門の範囲であれば、何とか理解できるものも多いはず。教科書や解説文に比べると硬くて読みづらいかもかもしれませんが、切り口は鮮明で、明確な結論も提示されており、論文を書いた著者の意図や意気込みもナマで伝わってくる分、自分の知識としてより深く身につきます。こうして一連のテーマに沿った日本語学術論文を読んでいるうちに、アカデミック・ライティングのための基礎体力が自然に身につき、専門に進んでもあわてないで済みます。日頃気になっているテーマについて、論文検索から始めてみませんか。

編集後記

最近、「アクティブ・ラーニング」という言葉を聞く機会が増えたと思います。これが実りを持つには、講師側の創意工夫はもちろんですが、聴講する学生の皆さんの姿勢がキーとなります。講義は決して一方通行ではありません。興味を持って熱心に聴こう、学ぼうとする学生の姿勢が、講師のモチベーションを何倍にも強化し、結果、その講義の質、満足度は飛躍的に向上します!(S)

高知大学共通教育広報誌  [ハイライン]
PipeLine No.50

発行 / 高知大学共通教育実施委員会
編集 / 共通教育実施委員会広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168 (学務課全学・共通教育係)

発行日 / 2017年12月
制作 / (有)西村謄写堂

広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail : gm06@kochi-u.ac.jp